

『第6回都留市男女共同参画推進フェスティバル』を振り返って



パネルディスカッションの様子



事例発表の様子



男女共同参画カルタのパネル展示

3月1日、都留市文化ホール小ホールにおいて第6回都留市男女共同参画推進フェスティバルが盛大に開催されました。当日は、冷雨の中でしたが、約200名の参加者があり、例年に比べ男性の数が多く、まさに男女共同参画社会に向けて、男性の理解の深まりを感じました。

内容は、前半に「東桂協働のまちづくり」の事例発表、後半には「それぞれの国から見た家族・地域」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、男女共同参画社会の実現に向けて具体的・建設的な意見が出されました。また、会場からも、多くのご意見をいただき、時間が足りないくらいでフェスティバルは有意義に終了しました。

今回は、企画運営に携わった都留市男女共同参画推進委員会と都留市女性団体連絡協議会からの報告とさせていただきます。

●事例発表 清水王也さん
東桂地域協働のまちづくり推進員

●パネルディスカッション
コーディネーター 関口稔夫さん
〔都留文科大学留学生担当〕

パネリスト
李 明鉉さん〔都留文科大学留学生、生、韓国ソウル市出身〕
陳 暢さん〔都留文科大学留学生、中国湖南省長沙市出身〕
ローリー・シマブクロさん〔英語指導助手、アメリカハワイ州出身〕
サイディ・マハムドさん〔中古車輸出業を営む、イラン・イスラ

ム共和国出身〕
渡辺千津子さん〔サイディ・マハムドさんのパートナー、日本出身〕



パネルディスカッションの様子

みんなで楽しむことが、地域のつながりを強めるのだと感じました。このような地区が増えていったら良いのではないのでしょうか。確かに「まちづくりは人づくり」です。今回のような、講演を重ねることによって、少しずつ地域のつながりへの関心が高まっていくような気がします。

【パネルディスカッション】
海外からの留学生などにより、「それぞれの国から見た家族・地域」をテーマとしたパネルディスカッションがありました。

韓国の李明鉉さんは、韓国は男性中心社会で女性は結婚したら夫に従い、年を取ったら息子に従い、食事も男性が済んでから女性が食べるという習慣があり、お父さんは腕力をもってお母さんを従えるという情景を話しました。その後、会場からの質問に対し、そういう家庭の情景は見ているけれど「僕は結婚したら腕力をふるうことはしみたいと思ってる」という答えに会場は「ほっと」安堵の空気に包まれました。

中国の陳暢さんの家庭は、お母さんが商売しており、お父さんが子どもたちの面倒を見ていたが、「男尊女卑」の習慣の中で、封建制が強く不平等の中で生きていく母親の姿を話されました。

ハワイ州のローリー・シマブクロさんは、女性でも男性と同じ職に就き、キャリアを持ち続けたいと若

いエネルギーに燃えていましたが、このあたりが今の日本の女性と共通したものが感じられて「大いに拍手を送りたい」と思いました。

サイディ・マハムドさんと渡辺千津子さんの間には、1歳になる子どもさんがあり、千津子さんは現在、子育てに専念しているけれど、自分が子育てのために、犠牲になつていくという観念はなく、絶えず子どもとスキンシップを持ちながら出来る限り自分の時間を持って満足していると話されました。夫のサイディさんは、自国の習慣として「男は仕事、女は家庭」ということで、女性はあまり労働意欲は持たず、おしゃべりに時間を費やしているということでしたが、日本女性の何時も忙しく働かまわる姿とは大分違うとも言います。そんなところにも、国による家庭の固定的役割分担という考え方がいろいろあるのではないかと思います。

このように、短い時間でしたが、会場からもいろいろ質問があり、有意義なパネルディスカッションでありました。

私たち、都留市におきましても「男女共同参画宣言都市」となり2年を経過しておりますが、今回のフェスティバルは確かな前進の歩みを感じ、心から力強く思いました。これからも、協働のまちづくり、男女共同参画社会に向けて、男性も女性もともにパートナーシップをとりながら、より良い社会づくりに努力していきたいと思